

月刊喜界島ジオパーク 令和7年2月号

公民館講座 喜界島の大地(ジオ)を知る体験教室 「遺跡発掘調査と喜界島」

喜界島ジオパーク推進協議会 事務局 土屋純子

12月7日(土)、第6回および第7回の公民館講座を開催しました。今回も午前中は座学が行われ、喜界島サンゴ礁科学研究所の駒越太郎研究員と、喜界町埋蔵文化財センターの松原信之学芸員が講師として登壇しました。松原学芸員による講義では、『よくわかる!島の遺跡!』をテーマとして、喜界島の遺跡について詳しく解説がありました。

これまでの5回の講座では、主に地形や地質に焦点を当てて学んできましたが、今回は「埋蔵文化財」や「遺跡」に関する内容です。サンゴ礁と遺跡ジオパークと埋蔵文化財といった組み合わせは、一見すると関連性が薄いように思えるかもしれませんが、しかし、過去に学んだ内容を踏まえてきた受講生たちは、この関連性にピンとききます。

【喜界島の遺跡について】

現在、喜界島には167か所の遺跡が確認されています(令和6年12月現在)。島の遺跡と地形には表のよう

- 遺跡は見晴らしの良い段丘の縁辺(端)に多く存在→段丘
- 遺跡は湧水点(湧き水)の近くに多い→湧水は段丘の切れ目から出てくる
- 大型獣はいないが、貝や魚が豊富な環境→サンゴ礁の海(表)



ことが理解でき、またその影響は現在も続いていることが分かります。

縄文時代の遺跡からは、喜界島では産出しない種類の石が出土しており、矢尻や石斧、石皿などの道具として使用された形跡が確認されています。こ

な密接な関連がありま

す。

これまで学んできた内容が、遺跡と結びつく瞬間を体験しました。喜界島の地形や自然環境が古代の人々の生活や遺跡の分布に大きな影響を与えている

これらの石は、島外から持ち込まれたものであり、火成岩(マグマが冷え固まってきた岩石)や堆積岩などが使われていたと考えられています。とはいえ、どのようにしてこれらの石が喜界島に運ばれたのか、今なお多くの謎が残されています。

午後、埋蔵文化財センターの松原学芸員と島袋学芸員の指導の下、発掘された遺物の洗浄作業と土器の接合作業を中央公民館で行いました。

発掘された遺物は泥に包まれており、トライに水をため、その中で丁寧に洗浄しました。泥を落として行くと、次第に遺物の姿が現れ様々な発見がありました。また、土器の接合作業も体験しました。破片を一つひとつ慎重に組み合わせ、時折「ピタッ」と



ぴったり合う瞬間が訪れると、参加者同士で大いに盛り上がりました。こうした作業を繰り返しながら、土器の全体像を少しずつ復元していくことの大切さを実感しました。

今回の講座を通じて、遺跡の発掘には多くの時間と手間がかかることを実感するとともに、喜界島の歴史や文化が地形や環境と密接に関わっていることを学ぶ貴重な機会となりました。

今年度の公民館講座『喜界島の大地を知る体験教室』は、第7回をもって最終回となりました。来年度も、喜界島の魅力をより多くの方にお届けしていきます。どうぞお楽しみに!

